

窯道具から見た我国の 施釉陶器の起源

はじめに 窯内の空間を有効に使うため、器物を何重にも積み重ねて大量に窯詰めするが、この際に釉薬が溶け出し器物同士が溶着しないようにするため、上下の器物の間に緩衝体(間隔具・墊具・トチン)を置く。釉面の破傷をできるだけ少なくするため、面ではなく点で受ける工夫が見られる。墊具類は中国では時代によっても変化し、また、それぞれの窯場でも使用する墊具類の形態が異なることが明らかになっている。本論は、日本の施釉陶器の墊具の実体を明らかにし、その淵源を探り、東アジアにおける施釉陶器の系統の中に位置付けようとするものである。

奈良三彩の墊具 平安時代初期の奈良三彩の窯跡は、洛北の岩倉幡枝地区で発見され、墊具も知られているが、奈良時代の三彩生産跡は未発見である。そこで、まず正倉院三彩に残された墊具の痕跡から、奈良時代の墊具を確認し、平安時代のそれと比較検討することにする¹⁾。

正倉院三彩にみられる墊具の痕跡には、1 3個の針目状の痕跡(三ツ目)、2 円環或いは円環の三カ所を挟った形の三弧形(三ツ齒)痕跡がある。多くは1であり、2は平底の大皿A(磁皿甲第1号・第2号・第3号)、高台が付く大皿B(磁皿甲第12号)、鉢形で平底の杯E(磁皿鉢第3号・第6号・残闕第1号)の7個体にみられる。大皿Aは内外底部の周縁部に複数(3個)の小さな三ツ齒墊具痕を残す。底が広い器であり、焼成中に歪むのを防ぐためであろう。大皿Bは内面底部周縁部の三カ所に三ツ齒墊具痕、外面底部中央付近には三ツ目痕を、杯Eの内、第6号も内面底部中央に三ツ齒痕、外面底部中央には三ツ目痕を留め、2種の異なる墊具を併用した事が知られる。また、環状の痕跡は必ずしも大型品に限ったことではなく、出土資料で

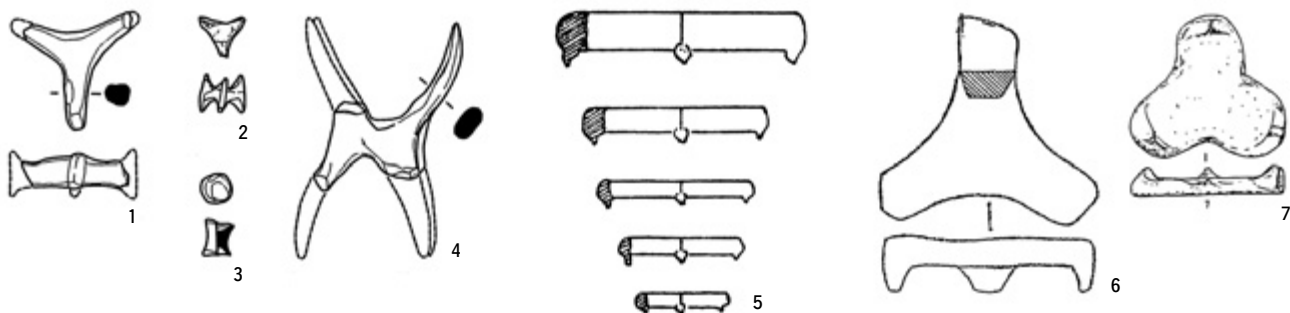
は三彩小壺の蓋内面にも認められ、この場合は、小壺の蓋と身を重ねて焼く際に両者が溶着しないように高く蓋を持ち上げるために筒状の墊具を使用したであろう。

三ツ目痕跡は、器皿の内外底部中央に1カ所、あるいは底部外面中央に1箇所あるのが一般的なあり方である。底の尖った鉢A(鉄鉢形)にも、尖り部を挟んで三ツ目の痕跡がみられ、使用した墊具は、平底に使う墊具とは形が異なり、肢の長いものが想定される。

平安時代の三彩窯出土墊具 洛北の岩倉幡枝に所在する栗栖野3号・21・22号窯では、3種の墊具が発見されている²⁾。1 三叉形で枝肢の先端の上下に低小な尖頭を捻りだした形態のもの、2 三叉形で、先端が尖る長い肢が上下にそれぞれ3本付くもの、3 小型の円筒形で上下を窪ませるものである(図19)。これら3種の墊具と正倉院三彩の墊具痕跡とは見事に対応をみせる。即ち、1は三ツ目痕跡と、2は尖底の鉄鉢形にみられる三ツ目痕跡と、3は大皿Aや杯Eにみられる三ツ齒痕跡と対応し、奈良時代にも同じ様な窯道具を使って三彩を生産していたことが分かる。

中国の墊具 ここでは、三ツ目墊具痕跡の原体に絞って検討する。華南地区の南北朝から唐代の青瓷窯跡、例えば、湖南省岳州窯、江西省洪州窯では小型碗皿に使う墊具は、いずれも薄い円環板の片面の縁に円錐形の針(乳釘)を3個貼り付けた形のものである(円環状トチン)³⁾。

華北では前漢早期に低火度一度焼き焼成の鉛釉陶器の生産が始まり、後漢まで主として墳墓に副葬する明器が盛んに生産されている。西晋以降、次第に生産は衰退するが、その後も細々と生産が継続し、北齊の時期に入ると技術革新が図られ、白色瓷土を胎とし、2度焼き焼成の白釉陶器や白釉緑彩陶器等が生産されるようになる。今のところ、漢代から北齊至る時期の鉛釉陶器の窯跡は



1～4 奈良三彩のトチン

5 華南青瓷のトチン

6 北方青瓷のトチン

7 唐三彩のトチン

図19 日中古代の施釉陶器用の墊具

未発見であり、使用した墊具の実体も不明である。この時期に生産された器種は、壺や奩、甗など大型品が主であり、碗等の小型品はほとんど知られていない。漢代墓出土品の壺類等の墊具痕跡には、小餅泥の痕跡(多くは3個)とヨリ輪痕跡が確認されるが、小型のトチン痕跡はみられない⁴⁾。また、華北一帯では北齊末頃から隋代には、華南から技術移植を行い青瓷の生産を開始する。所謂、北方青磁である。例えば、河北省磁県賈壁窯⁵⁾、河南省安陽市相州窯⁶⁾、山東省淄博寨里窯跡⁷⁾。これらの窯では、華南と同様な碗・皿や壺等の日常生活具を生産している。これらの窯跡の小型器種の三ツ目墊具をみると、華南地区と同じ様な円環状トチンも少量確認できるが、多くは華北に独特の形態の墊具である。それは奈良三彩にも使われている三又形トチンである。唐三彩の小型器種の重ね焼きに使う墊具も、この系統を引く三又、或いは三角形形態のトチンである。三又トチンは、初唐期に生産が始まる河北省淄博窯、河南黃冶窯跡では既に出現しており、やや時期が下がる陝西省長安城旧飛行場跡窯や山西省界庄窯でも同様な形態の墊具を使っていて、三彩工芸の基本的な道具であったことが知られる。奈良三彩と華北唐三彩、両者の墊具形態の一致は、奈良三彩が華北唐代の鉛釉陶器の系列に属することを意味する。ただし、仔細に両者の三又トチンを比べると、大きな違いがある。それは、華北唐三彩窯場の三又トチンは、片面は平坦な面をなし、対する面の3肢の先端部に小さな突起を作り出すのに対し、奈良三彩のそれは、上下両面の3肢の先端に小突起を作り出している。この違いは、釉掛け法と深い関係がある。必ずしも唐三彩に限らないが、器物外面の釉掛けは体部上半部のみにおこない、以下の部位を露胎にするため、両面に突起を作る必要はない。正位で重ね焼きする場合は、突起を有する面を下に来る器物内面底部の釉面に当て、反面の素面に別の器体の底部を重ねる。奈良三彩の場合は、正倉院三彩の碗など底部外面に施釉しない例も少数あるが、多くは内外全面に施釉するため、トチンの上下両面に突起が必要になる。両面突起のトチンは、隋代の青瓷窯、例えば山東省淄博寨里窯跡でも少量確認でき、必ずしも奈良三彩に固有のものではない。発見例は聞かないが、唐三彩の全面施釉製品に使われていた可能性も否定できない。

九世紀前半代には、尾張猿投窯では奈良三彩の技術系

統を引く低火度焼成の緑釉陶器とともに、灰薬を用いる高火度焼成の灰釉陶器の生産が始まり、唐に由来する新しい型式の器種を焼成するようになる。最新の灰釉陶器の編年では、最古の一群は人口灰釉ではなく、窯中での自然降灰を利用した施釉法で、器物を降灰が激しく、且つ高温状態の焚口付近に置いて焼成するものである。この技術は既に尾張猿投窯においては奈良時代後半代に獲得されていたもので、新しい唐風様式の器種の生産にも適応されたと考えられ、中国から技術移植することなく、我国で独自に開発された技術と考えられている。尾張猿投窯の灰釉陶器の器種は、華南越州窯系の青瓷系統とみて良いので、当時の越州窯の碗皿類の重ね焼きに使う道具、方法をみてみよう。この時期には越州窯では、碗皿類の重ね装填具には、三又トチンではなく、粘土餅を挟み具を使い匣の中に入れて焼成する段階に達しており、施釉法も漬け掛けで全面に施釉するものもある。一方、最古の灰釉碗皿は、内面のみに釉が掛かり、釉掛けも前述の通りで、明らかに越州窯の系統とは異なり、技術的な繋がりはいま一つ見出せない。ただ、この時期の施釉方法、自然降灰施釉に関しては、若干疑問点を残す。それは最古の灰釉陶器窯跡では、少ないながらも両面突起の三又トチンが出土しているし、その痕跡を留めるものも存在し、また前代の自然降灰製品に比べると、灰釉は明るく澄み斑なく掛かっているからである。これらを整合的に帰納すれば、やはり人口施釉とみた方が良い。想定されるのは碗皿類の内面を水、或いは膠などで溶いた液体で湿らせ、水に溶かしてない灰を直接塗せる方法である。中国には恐らくない施釉法であり、やはり、奈良三彩、およびその系統引く緑釉陶器の影響下、前代の自然降灰技法をヒントにして、日本で独自に改良した技術とみなされよう。

(巽淳一郎)

注

- 1) 日本経済新聞社『正倉院の陶器』1971 個別解説と写真による。
- 2) 古代の土器研究会『第7回シンポジウム資料』2003
- 3) 周能「浅談岳州、洪州、越州窯窯具の主要な特徴」『考古輯録』岳麓書社 1999
- 4) 西安市文物保護考古所 鄭州大学考古專業『長安漢墓』2004 図面・文章による。
- 5) 馮先銘「河北磁県賈壁村隋青瓷窯跡初探」『考古1959-10』
- 6) 河南省博物館 安陽地区文化局「河南安陽隋代瓷窯跡の試掘」『文物1977-2』
- 7) 山東淄博陶史編写組 山東省博物館「山東淄博寨里北朝青瓷窯跡調査紀要」『中国古代窯跡調査報告集』文物出版社1984